

飯吉透氏を招き 大学教育研究センターが講演会

大学教育研究センター主催で、カーネギー財団上級研究員・知識メディア研究所（KML）所長・飯吉透氏による「現在のアメリカ高等教育のテクノロジー

ジーによる変革」と題した講演会が、12月17日午後3時20分から521講義室で行われた。KMLでは、「授業をわかりやすいものにして、学生により分かってもらう」ために、Scholarship of Teaching and Learning (SoTL)として教員・大学機関・研究(学会)組織に対して活動を行っていることが紹介された。

これまで大学機関は、教育褒賞システムや永久在職権等で教育改善を促してきたが、十分に機能していない。教育改善を促すためには、「コミュニティとして協調的教育改善の過程にある状態」を褒賞対象とすべきである。KMLでは、コミュニティとしての教育改善活動を促す試みとして、数年前より情報技術を利用した「個人の教育改善活動実践事例を知識データベース化し共有するシステム」の構築を行っている。このシステムがコミュニティとしての教育改善活動を促進する(教育改善知識ベースとして機能する)ためには、教育実践内容の単なる「公開」・「情報開示」・「ポートフォリオ」ではだめで、実践内容についての自己分析に裏打ちされた内容で、15分程度にテーマを絞って完結する事が重要であることが明らかになった。

教育改善知識ベース作成を促すためには、作成負担の軽減が必要である。物証(シラバス・教材・教育過程の成果物)などの選定・分析と主体的活動を促進し支援するナレッジメントツールが必要で、KMLではKnowledge Exchange Exhibit Presentation (KEEP) Toolkit(2004年1月ツールを公開予定:web上でtemplateとして提供)を開発した。試用した結果、教育改善活動支援システムとして非常に有効であることが明らかになった。KEEP Toolkitの特徴としては三拍子(教授知識ベースの構築期間が短い・1~2週間・低コストで簡単に使える・自他共に面白い 達成感がある)揃ったことがあげられる。

アメリカでの開かれた教育[open教育用プラットフォーム&ツール(MIT)・open教育コンテンツ(MIT OPEN COURSE WARE OCW)・open教授知

識ベース)の三位一体の運用は、実践的教育改善コミュニティを形成するモデルとして期待される。openな教育コンテンツを基にKEEP Toolkitを活用して教授方法に関するコミュニティを形成することは、教育コンテンツの新しい活用法・教授法のアイデアの創造や、教育コンテンツの改良につながる事が期待される。



講演する飯吉透氏

「大学レベルで実践的教育改善コミュニティをいかに形成するか」という機関としての立場では、「文化・制度的抵抗」「時間的・経済的・知的・技術的制約」「プライバシー・知的所有権」「組織や個人の目標・価値観」といった様々な問題がある。Technology - Push (技術開発によって教育が変わる Note PC を持たせる)・Demand - Pull (教育上の必要によって技術が開発され、問題が解決される)・Vision - Drive(大学・個人が、教育に対して5年後・10年後にどのように技術を活用することを想定するか)という3種の相互作用を教育に働かせることによって教育に変革をもたらすことが期待される。

講演を終えて、「情報技術(PowerPoint)などの有効活用における課題」「情報技術の教育への活用に関する有効性の分析」についての質問がなされ、情報技術利用に関するサポート体制・学生の意識改革、評価可能な効果に基づいた戦略の必要性について言及された。

KEEP Toolkitに関するURLは、<http://www.carnegiefoundation.org/KML/>です。

(大学教授 電気工学科 後藤英雄)